



こんにちは！中国語翻訳をしながら、中国関連を主として文章を書いたり、絵を描いたりしております「ちかぞう」と申します。四千年の故事成語と題しまして毎回、あなたを『三国志』あり、『史記』あり、漢詩あり、含蓄あふれる中国古典の世界へのご案内しております。激動の歴史を経てもなお輝き続ける言の葉から、悠久の風とビジネスのヒントを感じ取っていただけたらうれしいです。

【刎頸の交わり】

(ふんけいのまじわり)

前回の『四千年の故事成語』「完璧(かんぺき)」の後、いかがお過ごしでしょうか。怒りに震え悲しみに嘆き・・・それでも逆境に活路を見出し、完璧へと続く歓喜の道をたゆまず歩いていってほしいと思います。今回の故事成語は、前回の「完璧」で活躍した藺相如(りんしょうじょ)の、もうひとつの物語です。中国の戦国時代末、紀元前3世紀の趙国から前回の後日談ともいうべきストーリーをご紹介します。強国・秦から趙国の宝玉「和氏の璧(かしのへき)」を「完璧」に守り抜いた藺相如は、趙王から大臣に任ぜられました。しかし戦場で生命を賭してきた將軍・廉頗(れんぱ)は、弁舌だけで自身より高待遇で迎えられた藺相如の存在がおもしろくありません。武将にはありがちなことですが、実直に過ぎた廉頗は方々で不満を言い募りました。かたやそれを聞きつけた藺相如はといえば、廉頗を徹底的に避けて回ります。道で鉢合わせしそうになった際にも、隠れるように自宅へ引き返す始末。これには従者たちも納得がゆかず「なぜそんな恥知らずな行動を取るのか」と主人をなじりました。藺相如はそんな部下をいさめます。



「秦王ですら叱りつけたわたしが廉頗を恐れることがあろうか。秦が趙を攻めないのは、わたしと廉頗將軍がいるから。いまこの両雄が戦えば二人とも生き延びることはない。最も優先されるべきは国家の危急であり、個人の恨みではない」。

後日この言を伝え聞いた廉頗は自らの不明を恥じ、もろ肌を脱いでいばらの鞭を背負い、藺相如の館の門前で深くこうべを垂れました。それまで長く心を通わせることのなかった二人は、ここで初めて「国に尽くす」という使命を共有し、互いに首をはねられても悔いないほどの固い絆＝「刎頸の交わり(ふんけいのまじわり)」を誓うに至ったのです。

さて二千数百年の時を経ても、主義・主張の異なる相手と仕事を進めてゆくのは容易なことではありません。とりわけ「刎頸の交わり」と聞いてロッキード事件を思い出す、ネットも携帯もない環境で青春を送った時人には、若者がどうやって人間関係を築いているのか理解し難いこともあるでしょう。それでも20代に話を聞けば「心を許せる友人がいる」割合は上の世代とさして変わらず、コミュニケーション手段こそメールやSNSに変わったものの、藺相如と廉頗のように互いの想いを分かち合いつつ交流を深めているのだとか。「刎頸の交わり」は一般に友情の厚さを表すとされる成語ですが、少しだけ深読みすれば、この故事はチームにおいて「使命の共有」がいかに重要か、現代の我々に示唆しているともいえるのではないのでしょうか。

原語で詠む古典

刎頸之交

【発音(ピンイン)】: wén jǐng zhī jiāo

(読み: ウェンジンヂーギョオ)

「刎頸の交わり」は、この故事の生まれた中国でも「刎頸之交」と書き、「その友のためなら、たとえ首を切られても悔いなくらいの親しい交際」を表します。ビジネスでも人間関係を日本以上に重視する中国で「刎頸之交」が得られたら、百人力かもしれませぬ。